

脳波で診る救命救急

意識障害を読み解くための脳波ガイドブック

原著：Suzette M. LaRoche, Hiba Arif Haider

訳：吉野 相英

評者

松本 理器 神戸大大学院教授・脳神経内科学

ER/ICU での持続脳波モニタリングの バイブルとしてお薦めします

近年 ICU での脳波モニタリングにより、集中治療期患者の転帰が改善するなどの報告がなされ、持続脳波モニタリングをはじめとした神経集中治療は欧米で注目されています。それに伴い、本邦でも ICU における脳波モニタリングの重要性が少しずつ認知されるようになってきています。ただ、本邦ではこれら ICU における脳波所見の判読やそれに対する治療アプローチなどに関して、包括的な日本語の教科書はいまだない状況でした。

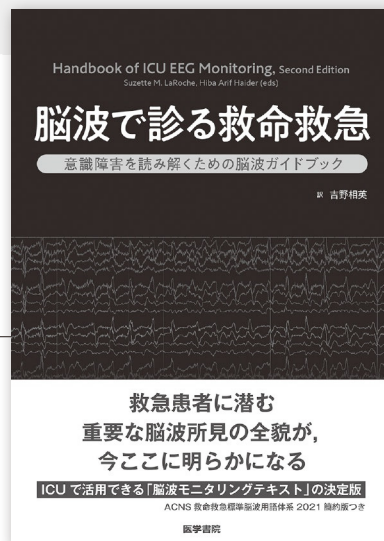
そのような状況の中で登場した本書は、英語の教科書として有名であった『Handbook of ICU EEG Monitoring』第2版の待望の日本語訳です。本書は、日本で集中治療や急性期疾患の治療に携わる脳神経内科医、脳神経外科医、集中治療医だけでなく、生理検査技師や看護師などのメディカルの方々にも有用で、集中治療期患者の脳波所見や治療のみならず、脳波測定の方法やモニタリングユニットにおけるメディカルスタッフを含めた脳波測定の運用の仕方まで含めた包括的な情報を提供しています。

本書の最初の章では、ICU での脳波モニタリングにおける基本的な原則や技術、実際の脳波測定の行い方について詳細に説明されています。次に、脳波モニタリングの適応疾患について記載され、臨床家が遭遇する、正常な脳波活動、異常な脳波活動、病態生理学が米国臨床神経生理学会の用語に基づいて記載されています。また、てんかん重積状態に対する治療アプローチ

についても詳しく説明されています。いずれの章も包括的ですが、箇条書きで読みやすい形式で書かれています。また各章には、脳波の実例やこれまでの研究に関する文献が豊富に含まれており、非常に実用的で通読も可能ですし、困ったときの辞書として調べることも可能です。本書の附録でも述べられている通り、米国臨床神経生理学会は2021年に脳波所見の用語の改訂を行っており、本書はそれ以前に出版されていますが、脳波所見の解釈や治療アプローチは本書で十分学ぶことが可能です。

また、最終章で述べられている ICU での脳波モニタリングに関する未解決の問題、例えばてんかん重積状態における最適な治療戦略の確立、脳波パターンと脳損傷の関連やリアルタイムでの脳波モニタリングの開発は今後の研究の方向性を決める一助になるでしょう。

総括すると本書『脳波で診る救命救急』は、重症患者の脳波モニタリングに関する包括的な教科書であり、最新の技術と臨床的なアプローチに焦点が絞られています。脳波モニタリングに携わる臨床家や研究者にとって非常に有用で、特に重症患者の治療に従事する医療従事者にとっては必読書といえます。本書の登場により、本邦における神経集中治療がさらに普及し、発展することを願っています。



B5 頁456 2023年03月 定価：15,400円（本体14,000円＋税10%） 医学書院刊 [ISBN978-4-260-05058-6]